文化財だより

第 20 号

平成19年 3 月

発行　真鶴町教育委員会

特集　語り継ごう　真鶴の昭和の生業と生活（二）

「真鶴の昭和の生業と生活」第二号の発行となりました。

戦中・戦後の動乱の世を行き抜いた真鶴の人びと。あわび、さざえ、磯魚を求め志摩から移住された海女さん。西湘地域は蜜柑景気に沸き返り東北地方から援農の方々のこえ、声、声。「おおさむ　こさむ…」寒ともなれば鰤大漁に浜は大賑わい。都市化の波は真鶴の採石業、回漕業に活気を与えました。今は見られなくなった銭湯、手作り煎餅駄菓子屋さん、曲物師…木造和船…などなど。

緑豊かな潮騒の聞こえる、ここ真鶴も首都圏域。社会生活の変貌の荒波が押し寄せ、昔の百年は今の十年でと、社会も人間関係も急激な変化を見せています。

今、私たち昭和の時代に生きた「証」を伝えないと、世代間の言語の断絶、心の断絶に成らないとも限りません。今回は、真鶴の大正・昭和の街中の変遷や生活を露木良彦さんに。石材採石から加工と手広く係わり小松石のことならと竹林勇さんに。蜜柑の最盛期のことや品質改良、剪定摘果など労働の喜びを三ツ木豊二さんに書いて頂きました。

蜜柑と共に六十年

三ツ木　豊二

昭和二十年八月、終戦により私の人生は百八十度転換せざるを得なくなりました。年齢は丁度二十歳、色々将来の事を考えて昭和二十三年根府川の柑橘試験場に研修生として入りました。

藤田克治場長の温情と御理解ある御指導により一年半蜜柑栽培の勉強をして今住んでいる山に入り一鍬一鍬開墾し蜜柑の苗木を植えました。

蜜柑は六、七年経ってようやく少しは実をつけるので県有林の仕事をしたり、山の木で薪を作って売ったり、春には泊りがけで蜜柑の剪定をして生活費を得たりして十年位過して来ました。少しずつ蜜柑も成るようになりましたが乳牛を飼って朝晩搾乳して出荷し生活費の足しにしたりしました。

昭和二十年後半から三十四、五年

目次

特集　語り継ごう
真鶴の昭和の生業と生活
蜜柑と共に六十年 …… 三ツ木　豊二 …… 1
伝えたい真鶴の石工文化 …… 竹林　勇 …… 2
真鶴銀座の変遷 …… 露木　良彦 …… 3
平成十八年度視察研修報告 …… 文化財審議委員　櫻井　武 …… 5
民俗資料館のご案内 …… 5
真鶴町重要文化財
第十三次指定物件一覧 …… 6
平成十八年度文化財保護事業 …… 6

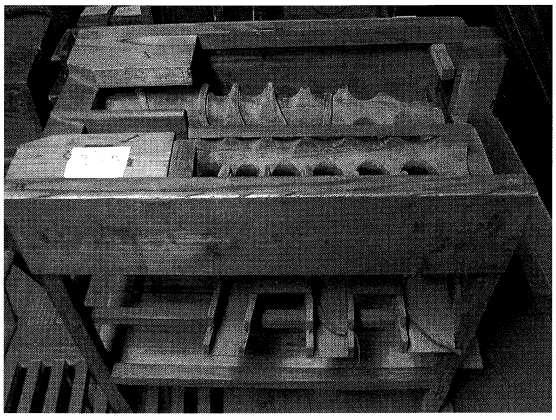
頃まで日本は高度経済成長に向かい、蜜柑もよく売れて「蜜柑成金」と言われる農家も全国で大分出来たようです。国の構造改善事業が推進され機械による開墾改植事業が広範に行われ今までのいも畑が一朝にして蜜柑畑に変り全国の生産量も三百六十万tを超え四百万tに迫る勢いになりました。

その当時岩農業協同組合の蜜柑選果場の取扱い量は約六百tで生産農家の懐も豊かになりました。

それから三十七、八年間蜜柑の価格も年により高値の年もありましたが低迷下落が続き農家の老齢化、後継者の不足により農協の扱う蜜柑の量は百tまで減少しました。百tの蜜柑ではいくら人件費を切りつめても限度があり、継続して市場に出荷も出来ず販売担当理事として苦慮の結果、湯河原三農協との共販を提案し地元の農家の理解もようやく得られ、まなづる農協と湯河原三農協との合同による同一選果場での販売態勢が整いました。

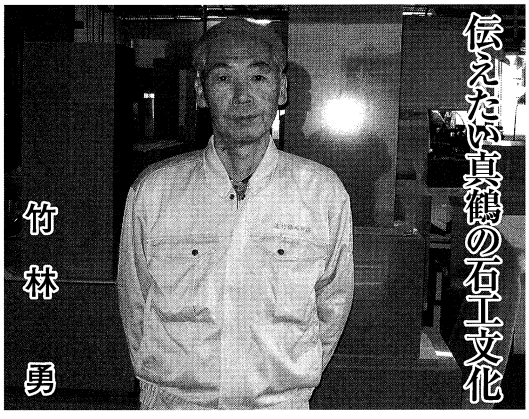
その年の蜜柑の販売は幸いな事にそれまでにない高値で売れて、合同の販売に内心反対していた人も納得して現在に至っています。只現在の世の中を見渡せば物が溢れています。若い人達は蜜柑類を喰べなくなりました。外国から珍しい果物が入って来ます。日本で野菜が不足となると中国あたりから津波のように輸入されるのが現状です。四百万tを越えた蜜柑の生産量も百tそこそこになりました。蜜柑農家も蜜柑だけ作っていたのでは時代に取り残される為、有望な品種の導入に努めています。

私自身もデコポン、湘南ゴールド、清見、はるみ等消費者の嗜好に合った品種を増産しています。八十二歳の現在、これからも生涯現役として何処まで続くか、無理をせずに楽しい老後を過ごすように心掛けています。真鶴町の一次産業の石材業、漁業、農業何れも現在苦しい時代を迎えています。何か町として特色のある産業は無いものか、一人で考えてもなかなか名案は出て来ません。三人寄れば文殊の知恵とも言います。町当局を中心として色々な人の知恵を結集して活気のある魅力のある町にしようではありませんか。



昔のみかん選別機

伝えたい真鶴の石工文化



竹林　勇

この原稿の依頼を受けたとき、私はまだ古老じゃないし、私より古い事を知っている人はまだまだいるのになと、思った。しかし私の父を初め、石工の職人で昔の事を知る人はもう随分亡くなってしまっている。そこで、よし自分の知っている限りの事、思いを書いてみようと決心した次第だ。

昨年（二〇〇六）の五月、私は連休を利用して娘とエジプト旅行に行って来た。どうしても元気なうちに一度〝ギザのピラミッド〟とアスワンの〝切り掛けのオベリスク〟を見ておきたかったからだ。

今から五五〇〇年前に建造された〝クフ王のピラミッド〟は、高さ一四三・五メートルもあって、その巨大さに私は圧倒された。石は設置場所の付近まで船で運ばれ、ソリやコロを使って持ち込まれたという。その石をただ積み重ねたのではない。詳細な設計図に基づいて建てられている。使用された石材は石灰岩と花崗岩だ。

アスワン地方の花崗岩の石切場跡には、ファラオ（王）のみに建造が許された〝切り掛けのオベリスク（石塔）〟がほとんど加工し終わった状態のまま放置されてある。キズが入ってしまったためだ。

この石に私が興味を持ったのには

理由がある。

今も真鶴半島のあちこちに、江戸城の石垣を切り出した当時の石割の矢穴の跡がハッキリ残っている。この穴はどのように開けたのか。どのように石を切り出したのか。それについて先人たちからこう聞いている。当時はまだ鉄が貴重だったので、セットウ、ノミを使って穴を開けたあと、樫の木のクサビを打ち込んで水を入れておく。すると次の日にはクサビが膨張して、石は見事に割れている。そんなふうにして石を切り出したという。

同じような方法で、五五〇〇年前のエジプトでも石を切り出していたと案内書を読んで知った私は、是非ともこの眼で確かめてみたくなったのだった。

江戸時代の末期（エジプトから見れば遥かに後世だが）、瀧門寺に建立された宝篋印塔は、その素晴らしい技術力と信仰心を見る者の心にひしひしと感じさせる。

しかし今、江戸初期の仏師但唱上人に代表される日本の石工技術は衰退の一途を辿っている。その原因の一つは、安価で豊富な労働力のある中国だ。もう一つは、石工企業は中小企業であるということだ。まして、効率の悪い手加工だ。

このような仕事は、もはや今の世に生き延びることが出来なくなってきた。

私の弟も、真鶴の最後の仏師になってしまうかも知れない。

遠く奈良時代より脈々と伝承されてきた石工文化を終焉させてはならないと思う。

ドイツでは「マイスター制度」と言って、職人の技術を後世に伝えるべく国が保護育成する方策を立てている。日本はなぜ、このような方策を立てようとしないのか。私には、はなはだ疑問だ。

何年か前に、京都の桂離宮の修復工事がなされた際、屋根の杉皮から壁、柱まで一つ一つ検分し、それがどこから採取された杉か土か柱かを探し歩いて、建築された当初の状態に戻したそうだが、それを工事する腕の良い職人が見つからなかったという。

要するに、良い仕事をすればする程赤字になってしまうので、職人が辞めてしまうのである。

実に寂しい限りだ。

小松石という素朴でおとなしい"侘び"（わ）"寂び"（さ）といった処何にも日本に似合った、日本に相応しい素材が、この町、真鶴にはある。何としても、後の世に伝えたいと強く願う。

現在の石材加工場

しかし自分一人、地団駄を踏んでいてもどうにもならない。

真鶴の石に携わっている人たち、みんなで頑張ろうと言うしか、今はない。

私は、石が好きだ。小松石がこよなく好きだ。この石は実におもしろい。

真鶴銀座の変遷

露木良彦

昨年の暮に町の教育委員会により、現在の職業に就いた業態の話でも書いて欲しいとの話がありましたが、業界の方にも同じような話が出ていましたので、私の家を中心にした、皆が忘れ去ってしまったり、朧気（おぼろげ）に思い出せる西宿中近隣の住時の姿を、遠い時の流れが逆流する様に、大先輩や友人、父母等に聞いた幼児の記憶の奥底に眠るセピア色の写真のアルバムを一枚一枚捲って伝えたいと思う。

何時の頃か、誰が言うともなく、私の住む西宿中の近辺の商店街を、真鶴銀座と呼ぶ様になったのは？その昔、種々様々な商店が軒を連ねていて、家の前の通りは、朝暗い中から夜半まで人の足音の絶えた事のない

賑やかな西宿中の通りだった。

遠く振り返れば私の家は大正三年に現在の魚角本店の前の、当時鈴木生薬屋（現青木煙草店）の隣に、父の兼太郎が露木理髪店を開業していた。因に私の家の前のかどや洋品店は、現在の梅床の位置にあって、西宿中の四ッ辻の角にあったので、店主の木村福松さんが角屋と命名したとの事である。又その前の青木浜広さん宅を昔から辻の家と呼んでいる。

大正七年三月二十八日の夕方、（俗に云う、おわか火事）が発生。折からの南東の風に煽られて現在の下町の青木幸次さん宅前の道向うの小屋から出火。みるみるうちに延焼大火事になり朝方までに二五〇戸を焼き盡して西宿中が一面の焼野原になり、私の家も角屋の家も皆焼け出されて、当分の間、点々として親戚の家で雨露を凌ぐ生活をしたとの事で、幸に県町有志の方々の救済で窮地を逃れる事が出来たとの事である。

灰の中から這い上がって新天地を求める被災者達が目を付けたのが、現在住んでいる土地である。当時は、小道が一本通っているだけの真鶴村字三枚畑で、広い畑が点在していて焼け残った小道の東側に半農半漁の家が点々と残っていて、父や母から聞いた畑中の家が二軒と、開化食堂（現在丸山の鈴木幸江さん宅）が残っていたと。私の家はバラック建ての平屋を建てて父と母が仕事に付いたと。かどやは立派な二階建で、釣具・化粧品・炭・薪・お茶・電球・下着類・半紙・学用品・足袋・カーバイトまで生活必需品は揃っていたとの事であったと、父から聞いていた。昔からあった家で焼け残ったのは楢原さんから上の方で、大きい家では平井屋旅館位だったろう。上の方で十内さんの家か、小林熊吉さんの家が八幡神の山を背にしていて助かったかも？

大正九年に海軍の無線電信所が文遺隊になって実習生が交替で常駐する様になって村の各商店が恩恵にあずかり海軍御用達の看板がそれぞれの店先に下げられる様になった。米岩商店・八百清商店・越後屋豆腐店・魚垂代魚角本店・楢原呉服店・私達理髪店も相原理髪店が東宿中へ池田理髪店が西宿仲へと町並が揃って町に活気が溢れて来たその矢先の…。

大正十二年九月一日十一時五八分あの関東大震災が発生。一瞬にして八二二戸中の四六七戸が全壊全焼それに波高六米の大津波が港内に押し寄せて流出九戸の大災害となった。町の中はすべて焼き盡されて次に日の朝まで燃えていたとの事である。

ここで特筆すべきは現在の港郵便局の裏に平井屋という二階建の旅館があって、大正五年に夏目漱石の書いた「真鶴行」の中に湯河原に湯治に来ていて女連れで真鶴のブリ網を見に来ながら平井屋旅館で昼食を摂る情景と、当時の港の風景が描写されており、通行人との会話の中で、揚げ屋が十軒もあると自慢気に村の景気の良さを協調している土地者の言葉も面白い。

大正七年の大火には焼け残った平井屋旅館は、その後、某伯爵の別荘を移築して三階建の旅館として、近在に名を知られたが、惜しむらくは大正十二年の大震災に全壊全焼して家族七名が全員焼死の悲しい結末を助けに行った父と母に聞き、人の哀れさを知る。

この大災害は大打撃ではあったものの、父や町の人達は結束して国や県に陳情して、灰かきや焼跡の復興に昼夜を分かたずに奮闘したとの事である。十二年から十五年までは幹線道路の整備で駅から海岸までの県道を造って行った。切り通しを何個所も作って最後に、真鶴小学校と真鶴橋で完成であると話してくれた。丁度、私が生れた頃の事である。

この間に東の宿にあった近藤牛肉店が青木祐一郎さん宅跡に開店し、前述の開化食堂の後に松屋履物店が私の家の下隣へ千石商店が開店、杉本菓子店の貸家に依元時計店が、森田さんの貸間に杵屋菓子屋店が、その隣が三木だんご店、八幡の空地に、松鶴旅館が、二・三年経つと千石家が現在地に開店。依元家も現在地に開店と目まぐるしい程の回転で動いて行った。

そして時は移り戦後になると、一時期配給制度の中で苦しい生活に耐えていたが、統制が解かれると商人は水を得た魚の如く商売に熱中。商店街も結束して客集めに力を入れる様になって行った。だが盛況も長くは続かなかった。それはバブルがはじけたから。それに輪をかけた様に、悪夢を見た。昭和四六年三月九日、二十一時、西沖の大火（鶴の湯）で十六戸を焼失、これによって真鶴銀座は消滅した。今は通りに灯が消えた様な町となり過去の繁栄は何時の日になるのか？少子化と後継者不足の大波を乗り越えて行けるのは誰か？

平成十八年度視察研修報告

櫻井　武

平成十八年十一月十五日、古民家をはじめとした文化財の保護と活用について、平塚市博物館と茅ヶ崎市文化資料館を訪ねました。

平塚市の博物館は全国でもトップレベルの博物館として知られています。昭和五十一（一九七六）年開館。歴史と自然をまとめた総合博物館で、運営に市民の力を積極的に活かしているのが特徴です。いまでこそ珍しくはなくなりましたが、市民と歩む地域博物館という考え方を日本ではじめて普及したのが平塚市です。それから三十年。着々と歴史を積み重ねてきただけあって、地域の百科事典として市民生活に欠かすことのできない施設となっています。建物はよくメンテナンスされており、二年に一度は常設展のリニューアルが行われています。館内には、江戸時代末期に建てられた農家が移築され、古い農機具と共に大切に保存展示されています。見学者は囲炉裏のある座敷にあがることができ、ここでお話会の催しも開かれるそうです。対応してくださった学芸員、案内職員、市民の解説ボランティアのみなさんがみな元気で親切、そして平日にもかかわらずたくさんの市民が訪れていたことが印象的でした。

一方、茅ヶ崎市の文化資料館も同じ頃に建てられたものですが、こちらはリニューアルされることなく、展示されている資料も劣化が進んでいました。古墳時代の見事な鉄剣が展示されていましたが、展示ケースの中で錆びたままなのです。鉄剣が出土しているということは茅ヶ崎にも独自な地域勢力が存在したことを示唆しますが、予算、人員が削られるなか、文化財をどう扱うかの具体的な方針もないまま対応に苦慮しているという話でした。写真は文化資料館の分館、同市堤にある旧和田家住宅です。これも江戸時代の農家建築の様式を伝える貴重な建物です。関東大震災にもびくともしなかったというケヤキの大黒柱が見事でした。ところが茅葺屋根の葺き替えが二十年来放置されてひどく傷んでいました。こちらも、この先どうなるかもわからないそうです。

相模川をはさんだふたつの自治体、人口は両市とも二十万人台、「文化」に対する取り組みの違いが地域活力の違いにもつながっているのでは？と懸念されるほど大きな差を感じました。

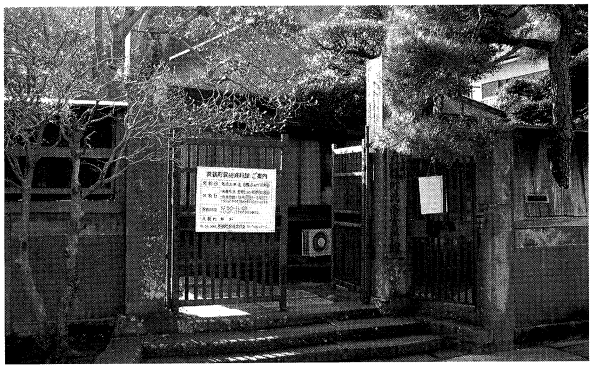
民俗資料館のご案内

真鶴町民俗資料館は岩地区の土屋文雄氏の御厚意により昭和61年2月に開館をいたしました。土屋家は、衆議院議員等を輩出したほどの名家であり、開館にあたっては旧邸内に残されていた貴重な美術工芸品、生活用品等を中心に町が所蔵している漁業・石材業関係の史料も展示しています。

またその建物自体も内蔵・外蔵を備え真鶴町における明治期石材商の住宅を伝える貴重な遺構となっております。大正震災後の建替になる書院棟は正規の座敷飾を備え、柱はやや太い桧の角柱を用いた書院造で建具も大正から昭和初期のデザインが見られます。

主な展示品は魯山人の菓子鉢、バナード・リーチの水入れ、犬養木堂の書、横山大観の掛軸等、その他漁業・石材加工用具、町内石造物写真パネル等を展示しており漸次展示変えしております。

開館日時は毎週火・木・土・日曜日（年末年始を除く）及び祝祭日（翌日は休館）の午前10時から午後4時までです。（12時から1時は閉館）一人でも多くの方がご来館の上、真鶴の生活文化にふれていただきたいと思います。



18年度、当町では真鶴町重要文化財第13次指定を行いました。今回の指定は古碑・記念碑の部9点、彫刻美術の部3点、民俗資料の部4点、考古資料の部1点の指定となっております。

真鶴町文化財保護条例の中で、「保護の価値ある文化財と認めるものは真鶴町指定重要文化財に指定することができる」と定められており、今回は平成10年の第11次・第12次の指定以来8年ぶりの指定となりました。

真鶴町重要文化財第13次指定物件一覧

登録番号	名称	時代	備考
1. 古碑・記念碑の部			
7	黒田長政供養塔	寛永12年	江戸築城のため真鶴・岩で採石に携わった福岡藩主黒田長政の13回忌に建立された供養塔
8	石工業中興祖墓碑群	寛永12年	口開丁場開発に功あった石工棟梁を岩村石材業「中興の祖」と崇め造建された石工先祖碑の傍らに並ぶ8基の墓標
9	岩築港記念碑	昭和9年	大正10年より自力築港から始めて岩漁港築港が完成したことを記念した碑
10	真鶴漁港築港記念碑	昭和9年	真鶴漁港修築完成を記念して建立された記念碑
11	水道記念碑	昭和4年	水不足に苦しむ町が水道完成の喜びを子孫に伝えるために建立された碑
12	世界近代彫刻シンポジウム碑	昭和38年	東京オリンピック会場に展示するため世界の近代石造彫刻家が集まり作品を制作した会場を記念した碑
13	品川台場礎石碑	昭和40年	海防のため品川沖に築造された台場の遺跡が埋立工事により失うことを惜しみ小松石の礎石保存として移設、記念碑とされたもの
14	町有林記念碑	昭和30年	「お林」の沿革と国有林払下げの経緯が彫られた記念碑
15	半田庄右衛門頌徳碑	明治24年	岩村の里庄であった半田庄右衛門の漁業への功績を称えた碑
4. 彫刻・美術の部			
10	福地六郎右衛門寄進手水鉢	寛永12年	佐賀藩鍋島家臣福地六郎右衛門が採石・廻運安全を祈願し奉納した手水鉢
11	五味伊右衛門寄進春日型石灯籠	寛永17年	代々庄屋を勤めた真鶴の旧家五味家の貴宮明神に対する信仰の深さなどを知ることもできる石灯籠
12	岩村中奉納手洗鉢	元禄6年	元禄年間の神仏混交時代が推察される重要な資料
5. 民俗資料の部			
10	「南無阿弥陀仏」念仏講碑	寛文7年	念仏講中により建立された「南無阿弥陀仏」名号碑
11	極楽東門	慶安5年	但唱弟子林貞による、極楽東門の表題と線刻の五智如来像が描かれた石造物
12	石造浮彫釈迦座像	慶安5年	岩如来寺跡の石仏群を作った作仏聖但唱の弟子林貞による浮彫釈迦座像
13	田廣家名号墓碑	天明4年	尻掛海岸近く田廣家屋敷墓碑内にある同家尻掛浦開発由来を記した墓碑
6. 考古資料の部			
7	貴船神社出土器・須恵器	古墳・鎌倉時代	神霊への供式に用いられたと考えられる杯や椀、器台など

平成十八年度文化財保護事業

◎文化財広報啓発事業
・文化財だより第二十号発行
・町民センター・民俗資料館展示事業
各施設で年間四回の企画展を実施

◎文化財審議委員調査研究事業
・十一月十五日、平塚市博物館及び茅ヶ崎市文化資料館・民俗資料館へ研究視察を実施

◎文化財審議委員協力事業
教養講座『くすのきゼミ』に講師として協力

くすのきゼミ「碑石小松石が語る庶民信仰を尋ね歩く」案内